

# 稽古（運動実践）における「ココロ」の問題に関する一考察

— 井筒俊彦『意識と本質』を手掛かりに —

保健体育科 那須野 親

## はじめに

ここ数年、日々の稽古がますます面白くなっている。それは、相手を「打てる（勝てる）」という、いわゆる勝つ喜びからだけではない。うまく言えないが、打たれても、たとえ負けても、ますます面白さの度合いは高まってきている。実に不思議であり、「文化の奥深さに少しだけ踏み込めた」のかも知れないと、嬉しくもある。そうは言っても、稽古において多くの実践者は、常に相手を打つ（勝つ）ために、相手をどのように崩し（隙をつくらせ）、その隙を合理的に打突するための身体動作の習得に意識を向ける。昨年度は「『身体知』獲得に向けた動作の言語化」をテーマに議論を展開した。この1年間、日々の稽古の振り返りにおいて、自らの身体動作の言語化から多くの示唆を得ることが出来たし、今後も続けていくことが筆者自身の技能向上に大きく関与する方法であることは間違いない。

また、最近あらためて挑戦した碩学の主著からの促しがあった。それは、言語化の先にある「脱言語」の世界へのいざないである。この碩学は、副題にある井筒俊彦である。1914年生まれで、同じ年には「日本の思想」（岩波新書）で知られる丸山眞男がいる。宇高の推薦図書目録をみればその認知度の差は明らかである。また、同じ東洋哲学に関する著作を多数もつ、鈴木大拙や柳宗悦と比べてもその認知度は著しく低いと言える。

さて、本稿の目的は、筆者自身の稽古（運動実践）における「ココロ」の在り様を整理することである。つまりは、筆者が今後向かうべき方向を模索することであり、自己研鑽の一助とするとともに、井筒俊彦の著作を手取る宇高生が一人でも生まれたとしたら誠に幸甚である。

それでは、本稿の進め方（手順）を簡単に示しておくことにする。

まず、1. 井筒俊彦 ～その人と哲学～で、父の影響、語学、エラノス会議をテーマにその一端をまとめる。次に、2. 意識と本質～精神的東洋を求めて～では、井筒の主著といわれるテキストに依拠し、東洋の哲人たちが身を置く次元を明らかにする。最後に、3. 稽古（運動実践）における「ココロ」～主客未分～として、井筒が共時的構造化という方法で明らかにした東洋哲学全般の特徴である絶対無分節の世界での「ココロ（意識）」の問題を筆者自身の稽古に引き寄せてみたい。

## 1. 井筒俊彦 ～その人と哲学～

これまで、井筒俊彦を論じた著作は少ない。彼自身も自らの境涯について、多くを語ることはなかった。同時代を生きた学者たちとの邂逅についても、井筒の著述から拾い上げるしかない。このような中で、初の長編井筒俊彦論と言える論考が出版された。「若松英輔（2011）井筒俊彦 叡知の哲学. 慶應義塾大学出版会. 東京」である。

少年期から海外生活時代、エラノス会議への参画、そして帰国後の執筆活動に至るまで、井筒の境涯と思想潮流について同世代人と交差させながら描き出している。本章では、若松氏の著述を参考にして井筒俊彦について述べることにする。

## 1. 1. 父から受け継いだもの

上述のとおり、1914年に父信太郎、母シン子の長男として、井筒俊彦は東京（四ツ谷）に誕生する。父信太郎は若い頃から書と囲碁、そして禅に親しんだ。禅への情熱は強く、曹洞宗本山永平寺で参禅するほどだったという。また、書については息子にこう語っている。

突然、自分の心が筆先に伝わって、紙の上に全部流れ出すのを実感した。単に文字を記すことではなく、人間の本当の一番奥のものがほとぼしり出て、しかも筆という毛の先に伝わってそれが流れ出してくる。それはもう腕と指のとめようもない動きである<sup>1</sup>。

内心に深い闇を抱き、特異な繊細さで罪業を感得する父親は、息子俊彦もまた、自分と同じ苦痛を経験すると思ったのかも知れない。それに耐え得る心身の構築を願ってか、俊彦がまだ幼い頃から、座禅と『臨濟録』、『碧巖録』、『無門関』などの禅籍の素読を強いた。修道において、導師の手加減は弟子への愛の欠落を意味する。父親の修道が、生と死の境界で行われていた以上、その厳粛なる影響が、息子に流れ込むのは必然だった。自身が語る父信太郎とのエピソードが井筒俊彦の原点『神秘哲学』（1949年）の序文に収められている。

私はこの父から彼独特の内観法を教わった。というよりもむしろ無理やりに教え込まれた。彼の方法というのは、先ず墨痕淋漓たる「心」の一字を書き与え、一定の時間を限って来る日も来る日もそれを凝視させ、やがて機熟すると見るやその紙片を破棄し、「紙上に書かれた文字ではなく汝の心中に書かれた文字を視よ、二十四時の間一瞬も休みなくそれを凝視して念慮の散乱を一点に集定せよ」と命じ、更に時を経て、「汝の心に書かれた文字をも剰すところなく掃蕩し尽せ。「心」の文字ではなく文字の背後に汝自身の生きる「心」を見よ」と命じ、なお一步を進めると「汝の心をも見るな、内外一切の錯乱を去ってひたすら無に帰没せよ。無に入って無をも見るな」といった具合であった<sup>2</sup>。

さらに、井筒は父について、「靈魂の戦慄すべき分裂を底の底まで知りつくした不幸な、憑りつかれた人」であったという。つまり、人間の不完全性ゆえ、免れることが困難な罪の深さと、その恐怖とを誰にもまして痛切に感じ、理想の世界（叡知界）へと自らの精神をひきあげるための修道ののちに「脱自」に至り、究極にはこの罪と恐怖から万人の救済を實踐することに憑りつかれた人ということ。瀧之原主義に似てますね。

井筒が「自分は哲学者ではない」という時、彼の心底に深々と根づく父の導きの強固さを感じる。現在もそうかもしれないが、世に言う「哲学者」は哲学研究者と混同される傾向があった。井筒が父から刷り込まれた精神が言う「哲学者」の仕事とは、まさに理想の叡知界（イデア界とも言える）に到達しつつ、現象界（現実の生活世界とも言える）に戻り理想を實現することである。すなわち、井筒にとっての「哲学者」とは現象界の人々を救済する実践家で在り続けることであり、自分は哲学者であるなどと簡単に公言できるはずもなかった。それでも彼は真の哲学者であろうとしていたことは、著述の端々に発見することができる。

<sup>1</sup> 若松英輔（2011）井筒俊彦 叡知の哲学。慶應義塾大学出版会。東京。p.14.参照。

<sup>2</sup> 井筒俊彦（2019）神秘哲学—ギリシアの部。岩波文庫。東京。p.11.

## 1. 2. 学問と言語

井筒は、青山学院大学付属中等部のカリキュラムを1年飛級で卒業し、慶應義塾大学経済学部に入學する。経済学部？違和感満載である。ビジネスマンの父信太郎が文学部への入學を許さなかったからである。漱石を愛読した父にとって、文学は天才鬼才のみに許された世界であり、息子には無縁だと思っていたのかもしれない。

しかし、井筒は動機のない経済学部への入學に悶々とした日々をおくり、初めての試験が終了すると、銀座数寄屋橋へ行き、分厚い簿記原論など経済学部の教材を川に投げ入れたという。そして、意気揚々と文学部に乗り込む次第となったのである<sup>3</sup>。

同じく経済学部から文学部への転部同志に池田彌三郎がいる。今ではあまり知っている人もいないかもしれないが、NHK クイズ番組「私だけが知っている」に出演し、タレント学者の草分けとも言える。今で言えば「林先生？」とか「尾木ママ？」ですかね。慶應義塾大学の文系学部で入試科目に国語がないのは、実はこの人の発想だと言われている。池田は、「英語で国語力はわかる」として国語の作問はせずに、小論文を導入したその人である。そう考えると宇高生にも結構近い人かも知れない。

池田はその後、折口信夫門下となり国文学へと傾斜していくこととなるが、井筒はひとりで西脇順三郎の門を叩いた。「学問は自分ひとりでするもの、孤独者の営みでなければならない」と言う井筒らしい身の振り方である。また、井筒が「生涯ただひとりの我が師」と書くのが西脇だ。英文学者、古典文献学者、言語学者であり詩人の師から「ギリシア神秘思想史」の講義の担当を任されたことは、その後の井筒の境涯に実に大きな意味を持つ出来事である。

井筒の言語への執着は師匠の影響により増大したのかもしれない。後年、司馬遼太郎や安岡章太郎との対談で、「大抵の言語は数ヶ月で読めるようになり、英独仏語にいたっては「抵抗」がなく「外国語」ですらない」という発言を残している。とにかく読みたいと思う古典は、すべて書かれた言語で読んだという。プラトン、アリストテレスを知り古代ギリシア語を習得、ロシア語でドストエフスキーと出逢う。そして、ヘブライ語で聖書（旧約）に出逢うこととなる。それがアラビア語での「コーラン」の読みと和訳を準備していたと言えよう<sup>4</sup>。正確な数こそ知れないが、それが30言語を越えていたと推察できる。教え子たちの間では200言語にも及んでいたという逸話もあるほどである。その中には、老荘など中国文献も多数含まれていることは主著『意識と本質』を手にとれば明らかである。

ここで確認したかったことは、全世界の思想・哲学を現実の意味連関（宗教問題や国際的な利害関係の問題）から引き離し、共時的構造化を方法として体系化できたのは、彼にとっては学問における「言語の壁」というものがほとんどなかったということである。井筒は世界の古典を原典で違和感なく読むことができた学者である。そうであったからこそ、時空を超えた全景を現在として示すことに成功した？と言える。『意識と本質』では東洋哲学でそれを実践した。しかしながら、井筒は、自らを「ギリシア主義者でありプラトニスト」（『神秘哲学』序文）だと言うことを見通すべきではない。東西地域及び時代に縛られることなく、父から受け継いだ修道を実践する中で、それぞれの地平に踏み込めるだけの意識が拓かれた学者であり、実践家であった。

<sup>3</sup> 前掲書。若松（2011）p.36.参照。

<sup>4</sup> 同上。p.60.参照。

### 1. 3. エラノスから『意識と本質』へ

1960年、井筒は46歳の時にカナダ・モントリオールのマギル大学を皮切りに同学のテヘラン支所、そしてイラン王立哲学研究所と海外での学際生活を過ごし、1979年にイラン革命激化のため日本へ帰国する。この間、エラノス会議に深くかかわり、ほとんどの論考を英文で発表している。

エラノス会議<sup>5</sup>への招聘がなければ、『意識と本質』は生まれなかったかも知れない。エラノスは、毎年8月にスイス、アスコーナのマッジョーレ湖畔で10日間程度にわたって開催される。その間、すべての参加者は食事、睡眠、生活をともにすることによって、議論の雰囲気は促進され、相互理解を深めていった世界で認められる超一流の学者が集う知的国際交流会合として位置づけられていた。参加者の名前をみればそのレベルは明らかである。カール・グスタフ・ユング（分析心理学）、ルドルフ・オットー（宗教学）、アンリ・コルバン（イスラム神秘主義）、ルイ・マシニョン（オリエント学）、ミルチャ・エリアーデ（宗教学）、アドルフ・ポルトマン（生物学）、シュムエル・ザンブルスキー（原子物理学）、その他にも数学、美学、音楽、文学からも専門家が集結した。日本からも鈴木大拙（禅研究・東洋思想家）や河合隼雄（分析心理学）など、それぞれの領域の第一級の学者が招聘されている。

井筒はこの会合で、1967年以来12回の講義を行い、15年間にわたって主体的に関与を続け、後半はその中心的な存在でもあった。井筒に求められた主題は、禅のことはもちろん、老荘の形而上学、孔子の意味論、華嚴、唯識などの存在論・意識論、朱子等による宋学、シャマニズム等々であった。そのすべてが『意識と本質』の主題となった。エラノスは哲学者井筒俊彦を育み、完成させたと言われるほどに彼の学者人生にとって重要な意味を持っている。

エラノスは、領域の壁に仕切られた「国際〇〇〇学会」などのいわゆる学会の枠に収まるものではない。ここに参加できるのは、先ほどあげた学者群からもわかるように、各領域の地平にある「真理」を見据える次元で議論ができる学者だけ。存在の深部に強い関心を抱く学者の一群である。彼らは皆、流れゆく時間とは別の次元、すなわち「永遠を志向する人間」でなければならなかった<sup>6</sup>。井筒の方法論的キーワードである「共時的構造化」は、彼のエラノスをめぐる15年の歳月をまさしく表象している<sup>7</sup>。

刊行当時（1980年代前半）もエラノスには参加していたし、国際学会での発表も多数ある中で、なぜ日本語で論文を書いたのか？当時の井筒の境遇を考えるならば英文で書かれるのが自然な気がする。このことについて『意識と本質』の後記で井筒は自らの学者遍歴を振り返りつつ、次のように言う。

青年時代、ヨーロッパの文学と哲学に感動し、その中に情熱的にのめり込んでいきながら、さりとして「東洋的なもの」の魅力も忘れきれず、結局、西と東の間を行きつ戻りつしつ揺れ動いてきた私だが、年齢ようやく七十に間近い今頃になって、自分の実存の「根」は、やっぱり東洋にあったのだと、しみじみ感じるようになった。ふと気がついてみると、そんな

<sup>5</sup> 「エラノス」という名前は古典ギリシア語の晩餐会に由来し、これは幾人かの客たちが自前で食べ物を持ってきて、互いに頰ち合い、食卓を囲んで談笑しあう会食を意味する。1933年にオランダ系イギリス人女性の神秘家・オルガ・フレーベ・カプタイン（Olga Froebe-Kapteyn）によってこのグループが設立された。60年以上の間、このイベントは異なる知の領域からなる思想家たちが人間の精神に関するさまざまな事柄を討議するための接点として貢献した。

<sup>6</sup> 前掲書。若松（2011）p.311.参照。

<sup>7</sup> 同上。p.304.参照。

自分を発見したのだ。それは私にとって、まだ漠然としてとりとめもない形ながら、自分自身の内面に私の東洋を発見することでもあった。生涯の転機とは、こうしたものなのだろうか。とにかく、この際、自分の哲学的実存の根源に立ち戻って、そこから新しく出発しなおしてみよう<sup>8</sup>。

少年時代、父から学んだ修道において、「思惟すること」を徹底して禁じられた井筒が、ギリシア（究極の思惟）と運命的に出会い「言語の壁さえなき次元」において邂逅する。この一見矛盾する事象の双方に同時にのめり込んだすえにみえてきた。いや、何者か大きな一者によって「見せられた」と言うべきかも知れない。現代の日本人として「ふるさと東洋」を論じるということは、われわれ日本人の実存そのものの中に混交する無時間化された東西の伝統が表出されるに違いないという偉大な「促し」があったからこそ、『意識と本質』は、日本語で書かれる必要があったのだ。

## 2. 意識と本質～精神的東洋を求めて～

ここでは、『意識と本質～精神的東洋を求めて～』で語られる意識の諸相について考えてみたい。意識についての最初の説明で、井筒はこう述べる。

意識とは本来的に「……の意識」だというのが、この意識本来の志向性なるものは、意識が脱自的に向っていく「……」(X)の「本質」をなんらかの形で把握していなければ現成しない。たとえその「本質」把握が、どれほど漠然とした、取りとめのない、いわば気分的な了解のようなものであるにすぎないにしても、である<sup>9</sup>。

つまり、「意識」とは、事物事象の「本質」を、コトバの意味機能の指示に従いながら把握するところに生起する内的状態である。意識を日常的な表層意識だけに限って考えるならば、意識の根本構造を規定するものとしての志向性には、本能的とでも言えるような「本質」の把握が常に先行する。この先行がなければ、「意識」は成立し得ないのである<sup>10</sup>。

われわれの日常的意識成立の次元においては、常に何ものかに向かって滑り出すことが条件となる。もし、このような原初的、一次的な「本質」把握もなしに、やみくもに「外」に出て行けば、得体の知れない不気味な「存在」の混沌の泥沼にはまり「嘔吐」を催すほかない。この「嘔吐体験」を説明するため、井筒は存在啓示の直前の状態として「言語脱落」を語るサルトルに興味を示している。「ついさっき私は公園にいた」とサルトルは語り出す。

マロニエの根はちょうどベンチの下のところ深く大地につき刺さっていた。それが根というものだということは、もはや私の意識には全然なかった。あらゆる語（ことば）は消え失せていた。そしてそれと同時に、事物の意義も、その使い方も、またそれらの事物の表面に人間が引いた弱い符牒（めじるし）の線も。背を丸め気味に、頭を垂れ、たった独りで私は、全く生（なま）のままのその黒々と筋くれ立った、恐ろしい塊に面と向かって坐っていた<sup>11</sup>。

<sup>8</sup> 井筒俊彦（1991）意識と本質－精神的東洋を求めて－.岩波書店.東京.p.409.

<sup>9</sup> 同上. p.8.

<sup>10</sup> 同上. p.9.参照。

<sup>11</sup> 前掲書. 井筒（1991）p.11.

このサルトルの意識体験を「嘔吐」と表すのは、どういうことなのか？マロニエを「樹木」として分節しない。ベンチの機能（人間が腰をかけるためのもの）もない。すなわち、日常的意識の世界を成立せしめるためのコトバの意味作用を機能させるための分節線が引かれていない存在、すなわちただの塊としてそこに在る。井筒はこれを「言語脱落＝本質脱落」という。本質が脱落すれば、無秩序（混沌）の塊が、怖ろしい淫らな裸身のまま怪物のように現れてくる。それが「嘔吐」を惹き起こす。

表層意識は、志向すべきところを全くもたなくなると、意識としての自らを否定するしかない。ここで意識は混乱状態に陥り一種の病的状態となる。この意識の病的状態を比喻して「嘔吐」と言っている。

井筒は、この「マロニエの木」の描写について、「本質」把握と「意識」志向性の関係をこれほど見事に形象化した文章を他に知らないと、サルトルを高く評価している。あの瞬間にサルトルが意識の深層を垣間見たことは事実である。もともと言語脱落とか本質脱落とかいうこと自体が、深層意識的事態なのである。しかし、「サルトルあるいは『嘔吐』の主人公は、深層意識の次元に身を据えてはいない」<sup>12</sup>と井筒は言う。だから絶対無分節の「存在」の前に突然立たされて、彼らは狼狽する。「一方、これに反して・・・」と井筒は続ける。

東洋の精神的伝統では、少なくとも原則的には、人はこのような場合「嘔吐」に追いこまればしない。絶対無分節の「存在」に直面しても狼狽しないだけの準備が始めから方法的、組織的になされているからだ。いわゆる東洋の哲人とは、深層意識が拓かれて、そこに身を据えている人である。表層意識の次元に現われる事物、そこに生起する様々の事態を、深層意識の地平に置いて、その見地から眺めることのできる人。表層、深層の両領域にわたる彼の意識の形而上的・形而下的地平には、絶対無分節の次元の「存在」と、千々に分節された「存在」とが同時にあまりのままだに現れている<sup>13</sup>。

もちろん修道を積んだものにもみ拓かれた地平ではあるが、東洋の哲人たちは、「現象界」いわゆる生活世界における諸事物・事象を無分節的に眺めることができるということだ。

老子も言う、

無名、天地之始。有名、万物之母。

（天地が生成され始めるときには、まだ名は無く、万物があらわれてきて名が定立された。）

故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼。

（そこで、いつでも欲がない立場に立てば道の微妙で奥深いありさまがみとれ。いつでも欲ある立場に立てば万物が活動する結果のさまざまな現象が見えるだけ。）<sup>14</sup>

とは、まさしくこのことである。この意識ならざる意識＝絶対無分節的に事物・事象を眺める境地を筆者自身の稽古実践に引き寄せて語ってみたい。誕生以来、4回目の子年を迎えた2020年（齢五十を目前に）、ますます稽古中の意識＝「ココロ」の置き所、在り様の重要さを感じてきた。筆者自身が、目指すべき「ココロ」の在り様について整理できればと考えている。

<sup>12</sup> 同上.p.14.

<sup>13</sup> 同上.p.16.

<sup>14</sup> 蜂屋邦夫訳注（2008）老子、岩波書店、東京、pp.11-17.参照。

### 3. 稽古（運動実践）における「ココロ」～主客未分～

7歳の時に祖父が稽古に行く道場遊びに行った。旭中学校の南側の住宅地にまぎれるようにあった道場。ここに「ふるさと武修館」はあった。数年前に取り壊され、住宅となり、今はもうない。第2次ベビーブーム世代の筆者が通った頃は小学生だけでも50名をこえる門下生がいた。中高生、一般社会人を入れれば100名以上はいたと思う。週に3日（月、水、土）の稽古日は、朝から憂鬱だったことが懐かしい（笑）。

それでも、玄関で一礼をして道場に入り、館長先生に座礼で「お願いします」の挨拶をすると、不思議とスイッチが入った。早く来た順に道場の雑巾がけをすることになっていた。掃除が終わると稽古が始まるまでの時間、みんなで鬼ごっこや時にはボールが出てきたりして遊んだことが実に懐かしい。こうなれば、朝の憂鬱さは何処吹く風だ。

稽古の始まりは当番の号令に声を合わせて「道場訓 剣は心なり 一つ礼儀を正しく 一つ姿勢を正しく 一つ気力充実し 一つ心身健康 一つ文武両道に励む」を大きく読み上げる。今でもすらすら出てくるフレーズである。子どもから高齢者までが竹刀を交え、それぞれの技量に応じて、楽しくかつ真剣に学び合う風景。これが剣道家としての筆者の原風景である。館長先生は門下生たちによく言っていた言葉が、ここ数年リアリティーを増して、筆者の内面に沁みてくる。はじめて手ほどきを受けた師：坂寄武雄先生の言葉である。

稽古や試合で、打たれて思うようにいかずイライラしたり、打てたことを誇張し、相手への敬意を忘れることは実に見苦しい。

剣道はね。打って反省、打たれて感謝の心もちで修行すれば一生強くなれるんだよ。ほんとだぞ。私（館長）は今が一番強い（笑）。

この「打たれて感謝」の境域に入るための「ココロ」もちが、なかなかつけれない。本稿の題目を「ココロ」と表記したのは若干の迷いがあった。「心」や「こころ」と表記してもよかったのかも知れないが、「心」や「こころ」という表記には日常意識の次元で、別の事物・事象が意識の滑り出しを喚起してくるような気がした。ここで筆者が対象とした次元は、日常生活世界においても志向対象をもたない深層意識に関する事象であることから、あえて見慣れないカタカナ表記にしてみたということである。井筒も『意識と本質』以降、「言葉」を「コトバ」と表記することが多くなった。「言葉」は本質を表現するに留まるが、「コトバ」は無分節の世界から事物を創造的に喚起するという<sup>15</sup>。

それでは、日々の稽古実践における筆者自身の「ココロ」もちの変化について整理しつつ、井筒の論考から示唆を得た新たなステージ、今後目指すべき「ココロ」の在り様について整理していく。試合中心の稽古に終始していた30歳代前半までは、常に「相手に打たれずに、打つ」ための動きに意識を向けていた。したがって、相手は「打つべき対象」として立ち現れる。この時、打つ主体が<わたし>で、客体は相手の<打突部位>ということになる。身体能力的にもピークを迎え充実していた時期かも知れない。実績という実績はないが、最も身体が動いた、動けた時期であった。スピード・スタミナ・パワーにまかせての稽古に終始した。

井筒の意識論で言うなら、表層意識が<打突部位>に向けて不断に滑り出していくと言ってもいい。この頃の稽古に対する筆者の「ココロ」もちを振り返ると、「打って喜び、打たれて悔

<sup>15</sup> 前掲書。若松（2011）p.381.参照。

し」だった。打たれると「くそ」、次は「絶対打ってやる」という感じ。それから10年以上、その時々的情況によりテンションの強弱はあるが、稽古を続けてきた。ここ数年（45歳以降）稽古が面白くなっている。冒頭で述べたように「打たれても、たとえ負けても」面白いのだ。剣道部の後輩たちにも日々の稽古でよく打たれる。「いい所、いい技が出た。まいった。」そんな時、思わず声になる言葉である。勝負が終われば相互に「礼（ありがとう）」を尽くす。そう、あの「ふるさと武修館」の館長先生が伝えたかったことはこれか？

「打って反省、打たれて感謝の心もちで修行すれば一生強くなれる」この言葉を深いところで理解できる段階に入るまで40年かかった。「私の弱点、課題としているところを的確に打っていただき、ありがとうございます」「次の稽古で課題として取り組んでいきます」という具合に、「打たれて学ぶ」が稽古の王道であるということが、やっと、少しだけわかってきた。まさに師弟同行である。芸道の世界でよく言われるが、それぞれ修行段階はちがえども、「師弟ともに、その道の修行者である」という大前提。師匠の技量が止まる時、弟子の成長も止まる。指導者の心構えを説いた言葉である。

このような考えで稽古が出来るようになってから、相手がこれまでとはちがって見えてきた。どういうことか、打つ主体が<わたし>で、客体は相手の<打突部位>という主体—客体関係ではなくなってきた。<私=ココロ> — <打突部位> — <相手=ココロ>に区別がなく、いわゆる意識の志向性を生起させる分節線がないため、相手は「打つべき対象」としても意識されない。互いの<ココロ>にはさまれて<打突部位>があり、<ココロ>と<ココロ>が一つになる時、これを「合気」と言ったりするが、互いに「いくぞっ…いくぞっ…うーっ」と<ココロ>のエネルギーが最高潮になる時を言う。この「合気」を逃げない稽古が実に面白いのである。「合気」の重要性を確信させたくだりがある。

しばらく十方の水を十方にして著眼看すべき時節を参学すべし。人天の水をみるときのみの参学にあらず、水の水をみる参学あり、水の水を修証するゆえに。水の水を道著する参究あり、自己の自己に相逢する通路を現成せしむべし。他己の他己を参徹する活路を進退すべし、跳出すべし<sup>16</sup>。

道元の「山水経」の一部である。井筒の訳文を参考に解釈すると、十方世界の水を十方世界そのままの視点から見る絶対無制約的な立場というものを学ばなくてはいけない。人間や天人たちが、それぞれの立場から水を見る見方を学ぶこととは違う。水が水を見る見方を学ぶのである。水が親しく水を悟るのだから、水が水を語り明かすことになるのだ<sup>17</sup>。自己の真実を実現して真の自己に出逢う通路が生まれる。他もまた自己の中の他であることに気がつくことによって、他の真実を窮める道にいけるだろう。

偉大な東洋の哲人の言葉であるため、訳出しても難しい。筆者の問題として読めば、日常の世界に生起する<私=ココロ> — <打突部位> — <相手=ココロ>で繰り返される現象が稽古であるならば、<私=ココロ>や<相手=ココロ>の見方で「稽古」を見ていてはまだまだ。それぞれの主体としての意識ではなく、「稽古」が「稽古」を見る見方を学べということ？互いの「ココロ」が合気へと高まり、自分と相手が渾然一体の主客未分（打った、打たれたを

<sup>16</sup> 道元著、水野弥穂子校注（1990）正法眼蔵（二）、岩波書店、東京、p.192.

<sup>17</sup> 前掲書、井筒（1991）p.178.参照。

超越した)の稽古を目指していきたい。相手とつくりあげる質の高い充実した「合気」の世界における「打って反省、打たれて感謝」の繰り返しによって、新たな世界が拓け、さらに美しい景色に出逢えることを信じて、さあ、稽古をしよう。

## おわりに

昨年度の寄稿を読んでもくれた、ある生徒と保護者のコメントに勇気をもらい、恥ずかしながら本年度も寄稿させていただいた。

昨年度は『言語化』に向かい、今回は『脱言語』？まったく一貫性のない題目である。しかし、筆者自身の中では実にスムーズに連続するテーマとして捉えている。井筒俊彦をはじめ知ったのは20数年前(院生の頃)である。当時の指導教官から渡された『意識と本質』である。当時は全く歯が立たなかった。それでも、「理解できるようになりたい」いや「これは読めるようにならないといけない」という強烈な衝動に駆られた。

周辺著作とも格闘しつつ、あれから何度も挑戦し続けてきたし、今後もそれは続くだろう。稽古における修行段階とも共鳴しながら、読む度に沁み方がちがった。宇高に赴任してから、週に1回、剣道八段の先生に稽古をお願いするようになった。この先生との稽古が「ココロ」の在り様を探求する動機でもある。その先生には、「ココロ」を見透かされている気がしてならない。「打たれたくない、でも打ちたい」「ここで打っていけば、打てるかな？だめかな？」等々、筆者の迷いが伝わってくるという。稽古後のアドバイスは、いつも「今日もよく見えた」と言われる。

そんな状況で、もがきながらも光を探った。そんな中で、久々に手にした『意識と本質』で「豁然貫通」と再び出逢った。

天下に存在するすべての事物の理を次々に窮め、ついにその至極に到達することを要求する。こうして努力を続けること久しきに及べば、ある時点に至って突如、豁然として貫通するものだ。そうなれば、一切の事物の表も裏もあますところなく開示されるとともに、己の心の本体がそっくりそのまま開顕し、同時にその心の広大無辺の働きが残りなく明らかになる<sup>18</sup>。

つまりは、「今日は、花を窮め」「明日は雲を窮め」「また次の日は…」というように、事物の本質を、その深層構造まで追求し尽くすことに向かうことで、徐々に心の深層界が開かれていく…そして、突如として、その心の広大無辺の働きが残りなく明らかになる。これを「豁然貫通」と言い、まさに「心の深層領域」が拓かれる瞬間のことだろう。そこから事物を見ることが出来る者たちが観る世界(花・木・雲等)は、表層意識で見る「花・木・雲」では、もはやないのかも知れない。言葉を尽くして事物・事象の真の姿を窮めることに誠実に向かい、それを繰り返しながら突如その先の「脱言語」に至る。まさに、「言語化」と「脱言語」は連続した事象として捉えたい。

この次元で稽古ができれば、相手の「ココロ」もきっと見えてくるだろう。まだまだ、遙か先の境地だ。それでも後輩たちとの日々の稽古で「合気」になる瞬間が増え続けている。本当に面白くて、ありがたい。筆者もやっと「ココロ」の修行に入ったところ？なのかも知れない。

---

<sup>18</sup> 同上. p.92.

真の瀧之原健児になるためには、＜ココロ＞の修行の入口で、後輩たちと誠実に「師弟同行」に向かうことが最善の道であることを信じて、本稿をとじることにする。

【主要参考文献】

- 1) 井筒俊彦 (1991) 意識と本質－精神的東洋を求めて－. 岩波文庫. 東京
- 2) 井筒俊彦 (2019) 神秘哲学－ギリシアの部－. 岩波文庫. 東京
- 3) 井筒俊彦 (2019) 意味の深みへ－東洋哲学の水位－. 岩波文庫. 東京
- 4) 井筒俊彦 (2019) コスモスとアンチコスモス－東洋哲学のために－. 岩波文庫. 東京
- 5) 若松英輔 (2011) 井筒俊彦 叡知の哲学. 慶應義塾大学出版会. 東京
- 6) 道元著. 水野弥穂子校注 (1990) 正法眼蔵 (二). 岩波書店. 東京
- 7) 蜂屋邦夫訳注 (2008) 老子. 岩波書店. 東京
- 8) 鈴木大拙著. 北川桃雄訳 (1940) 禅と日本文化. 岩波新書. 東京
- 9) 柳宗悦 (1984) 民藝四十年. 岩波文庫. 東京